



Title	古代北日本の画期と移住
Author(s)	八木, 光則
Citation	94-109 新しいアイヌ史の構築：先史編・古代編・中世編：「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/56284">http://hdl.handle.net/2115/56284</a>
Type	report
File Information	pt2ch4.pdf



[Instructions for use](#)

## 第4章

## 古代北日本の画期と移住

八木 光則

盛岡からまいりました八木と申します。どうぞよろしく申し上げます。盛岡に住んでおりますが、もともとは八雲の生まれでして、そういう意味では移住者の、移民の末裔です。ですからそれほど移住とか移民について違和感があるというわけではなくて、かなり親近感を持っているはずなんです。ただ一方で、考古学の分野において結構移住とかということがよく使われる。ところがそれは本当に妥当なのかどうかということ、やはり考古学としては検証する必要があります。そういうことで今日の報告は、どういった考古学的な資料になれば、これは移民ですよと、あるいは移住ですよということがいえるのか、あるいはその逆はどうなのかということ、その辺について整理をしたいというのが今回の報告の趣旨です。

それでは配布資料に基づいてお話ししたいと思うんですが、移住、移民の類型ということで、ごく大ざっぱに遊動、移動、移住、移民というような区分けをしております。遊動というのはそのテリトリーというか、一定の領域の中で移動していくというようなこと。端的に言えばネイティブアメリカンのような形で、キャンプのように移動していくような形です。それから移動、これは行旅や通商などというようなことを想定しています。

そして今日は移住とか移民ということを中心にお話しするわけですが、ほかの土地へ移って、生業を営みながら一定期間の居住を目的とするのを移住という、そして移民というのは、国家、あるいは組織的な、他国への永住を目的とした移住を移民という、そういうふうに区分けを考えていると思っております。このほかに考えられるのは婚姻です。結婚によって、どのような形で動くのか。これについては煮詰めなければいけません。今回は省かせていただきたいと思っています。

次に外来的要素からみた人の動きについてですが、いくつかの類型を考えてみました。AからEまで、5つの類型なんです。Aとしたのは移住者あるいは移民の残した遺跡、集落、そういう場合は例えば住居だとか、あるいは土器、そのほとんどが外来的な要素で占められるという、そういう場合を移住者、あるいは移民の残したものと考えていきたいと思っています。もう結論から今、申し上げているような感じなんです。具体的に言うと田向冷水という八戸市にある遺跡や宮城県の県北の御駒堂遺跡です。そういった集落が該当します。在地的な要素が非常に少ないということで、在地住民との接触は希薄だったろうと考えられます。

それから次にB類型ですが、移住者あるいは移民が主体なんですけれども、それに在地住民のかかわりがかなり入っているもの。物的支援あるいは人的な徴用が行われたものです。外来的要素、特にこの場合には住居が外来的な要素として取り上げられると思うんですが、それに在地的な要素が混在するものです。具体的には仙台市の南小泉、それから栗原市の伊治城（コレ

ハリジョウ) 跡、それから盛岡市の志波城跡、そういった施設の中の住居群に多くみられます。

それからC類型は在地住民主体であるということです。これは具体的に言うと官営事業の一環として徴用させられた人々の集落で、大和町一里塚や東山というような官衙(カンガ)関連遺跡です。

D類型は在地住民が主体になるもの。在地的な要素、特に煮沸、煮炊きに使う甕、それに在地的要素が色濃く残る。生活様式の変化が伴うような外来的な要素が加わるんです。具体的に言うと八戸地方の成立期の古代集落、それから北海道の擦文文化成立期の集落が該当します。

最後にE類型は在地住民がほとんどであるということです。具体的には東北北部におけるいわゆる続縄文的な生活様式、それから津軽平野の平安期の集落といったようなものを挙げておきます。

ところで今回扱う範囲というのは、北海道の西南部から東北の中南部までです。時期的にはおおよそ4世紀から9世紀ぐらいです。

配布資料の修正について、右端の「囲郭集落、郡家の成立」を7世紀の中ごろと書いておられますが、囲郭集落そのものの初源というのは6世紀末です。囲郭ではなく区画集落と言う人もいますけど、あまり大きな違いはないので囲郭集落でよろしいと思います。

次に各類型を細かくみてまいります。時代的にお話しすると分かりやすいのかもしれませんが、このタイプの順番に従って話をしていきたいと思います。

A類型のうち、ひとつめは東北北部の古墳時代集落で、これは5世紀後半あるいは6世紀の初めぐらいまでの遺跡で、八戸市の田向冷水遺跡が該当します。5世紀後半の竪穴住居が突如この地域に出現いたします。現在まで10棟近く確認されています。大きくみると二時期に分かれるようではありますが、おおよそ5世紀後半から6世紀の初めぐらいまでの時期と考えられています。

この住居の特徴というのはかまどを備えていることで、住居の一辺に逆U字形に付いている部分がかまどです。そのかまどの煙道はというと外に延びないものです。壁の中で収まってしまふものがほとんどで、ほかに長煙道、長く外に延びる例も中にはあります。SI-35住居跡はそういった長い煙道をもつものです。

土器は土師器が主体です。図にありますように大半は土師器です。ただし続縄文というものも図の2段目に2点ですが図示してあります。これは破片ですし、住居の埋め土の方から出ているということで、ちょっと土師器とは使い方が違っていた、入り方が違っていたんだろうと考えられています。そのほかにも図の下の方にありますけれども、石製の模造品、これは古墳文化の祭祀遺物として特徴的なものです。また一方で黒曜石製のスクレーパーというものも出ているということです。概して言うと、その土師器、古墳文化のものが主体を占めるということになっています。

土師器の特徴をみていきますと、坏と甕でちょっとニュアンスが違いまして、坏はこの地域で作られたというよりも、ほかの地域の要素が非常に強いものです。運んできたとは言いませんけれども、この地域でもともとあったものではないんだろうと思われれます。それに対して甕の方は、あまり一定化してないという特徴があります。東北南部に行きますと、器形のパターンがある程度確立しているんですが、ここではあまり確立してないところがあります。

そういうことからいきますと、おそらく土器というのは在地で作ったものであろうと、土器

そのものをほかの地域から持ってきたということではないんだろうと思います。ただ、そうはいいまして、これ全体を通してみると、突如としてこの集落が出てくることを考えれば、これはやはり移住ということを考えざるを得ないと思います。

どこからやってきたのかということが問題になってきますが、おそらくこの土器の特徴から言えば東北南部であることは間違いない。この土器の組成で1つ欠けているものがあるんです。それは高坏です。高坏が欠けている。宮城県ではほとんど高坏がこの時期のセットとしてきちんと含まれています。それがない地域はどこかということ、胆沢地域です。岩手県の南部、胆沢のあたり。あるいはもしかするとこれは遺跡が分かっていないだけなので、何とも言えないんですが、例えば北上川河口域の石巻のあたりが想定されるかもしれません。

石巻の方が本当は説明が付きやすい。というのは八戸に来るためのルートというのは、おそらくは海上ルートを通ってきた、沿岸ルートを通ってきたんだろうと思われれます。仮に内陸経由ですと、胆沢から北上川をさかのぼって、盛岡を通過して八戸まで行くんですが、途中で痕跡が残っても良いのですが、それがありません。やはり北上川の河口から三陸伝いにやってくる。その方が説明は付きやすいので、そう考えたいんですが、今のところ石巻のあたりで遺物がはっきりしていないということです。

最近、この近くの岩手県の久慈市というところ、ここではたった2棟ですけども、似たような集落がみつかってきています。ですからもしかすると一カ所にぼんと来たのではなくて、いくつか点のような形でぼんぼんと移住者がやってきている可能性も考えられます。

次に宮城県北の古代集落の栗原地域、今は合併して栗原市になっていますが、御駒堂という遺跡です。いくつかの段階があるんですが、そのうちの第2群段階という8世紀前半の時期。この時期に関して言いますと、短い煙道、外に延びない煙道、あるいは白色粘土を使った張り出しかまど、壁の外にかまどの一部が張り出すような形。図の右側の例が、張り出しのかまどというものなんですが、そういったものが22棟確認されています。13、15、24、27、28号住居跡などがそういった時期になっています。関東的な要素と考えられています。

土器をみてもこちらのものではない、関東的な要素が非常に強い土器が出ています。そういうことからしますと、土器も含め、それから住居の構造も含め、非常に外来的要素が強いということで、これは移住者のものであろうというように考えられます。ただ文献からみると、この栗原地域に移住者が移されるのは8世紀の後半ぐらいになってからがほとんどです。このあたりには伊治城（コレハリジョウ）というものが造られるんですが、その前後に全部で1万人を超えるような移住者がやってきたことが、記録としては残っています。ただ、この御駒堂はそれ以前の集落ということになります。ここまでがA類型、移住者の集落と考えられるところ

です。次にB類型にいりますが、今度は仙台から大崎平野、関東移民があったんだろうと考えられている地域です。ここでは時期的には古いところは6世紀の末なんですが、8世紀の前半ぐらいまではどうも続きそうだといいこと。特に古い段階のものを取り上げますと、仙台市の南小泉遺跡では煙道がないかまど、それに漆仕上げの土師器の坏が特徴的です。表面に黒漆を塗っているものはもう東北のものではありません。北関東あたりのものといわれています。それから胎土が密の土器、非常に土が細かくて、しかもその中に赤褐色の粒を含んでいるものです。こ

れも在地ではないように考えられています。一方で在地的な甕などが共伴したりしています。

それから同じ仙台の郡山遺跡、ここでは7世紀の中ごろになりますと郡家がつくられるんですが、その前段階にやはり集落が形成されています。それをプレ集落と言っているわけですが、そこでもやはり煙道のないかまど、それと関東系の土師器、さらには在地系の一部の土師器坏が共伴するというような形になっています。こういうことから「南小泉については政治的、社会的圧力を背景とした、人や物資の移動があった」という、村田晃一さんの発言があるわけですが、そういったものをベースにして、さらに在地からの物資供給が図られたと考えられる遺跡です。

それから時代は少し新しくなりますが、城柵内の例です。栗原の伊治城ですが、769年から796年までの間に浮岩百姓ら約1万2,000人の柵戸の移配が記録されています。この遺跡はホタテ貝のような全体の形をしています。そのうちの北半分に竪穴住居域が形成されているといわれています。まだトレンチ調査なので、全体で何棟あるかというのはまったく分かりませんが、確認されている中の約半数、47%が関東系の短い煙道、あるいは張り出しかまどとなるといわれております。

その伊治城跡の土師器というのは、轆轤成形が始まっている時期にも当たっておりまして、轆轤成形の土器が入ってきております。最初の段階は轆轤を使わない土師器の坏と、それから轆轤を使うものが共伴しています。だんだんと新しくなると、轆轤成形の割合が高くなってきます。

甕の方も初めは轆轤を使ってないけれども、だんだんと3段階目ぐらいから轆轤も入ってきます。それと非轆轤のもの、それは伝統的な土師器の作り方ですが、そういったものが混在しているということです。それでだんだんと轆轤成形の比率が高まってきます。ですから伊治城という城柵を造った時点で、轆轤の技術というものが入ってくる。入ってきて、それなりのものも作られるわけですけど、それと同時に在地の土器も供給されているという状態です。

次に志波城は803年に造られます。811年には早くも移転しようという案が出てくるわけですが、そのときに2,000人の兵士がいたというようなことが記録があります。発掘調査では竪穴住居がたくさん確認されていまして、全部は掘っていませんけれども、今の推定ではのべ1,000棟から2,000棟ぐらいの竪穴住居が城内に配置されていたと想定されています。のべといっても10年程度ですから、非常に一時期の密度というのは高かっただろうと思われれます。その竪穴住居の中からは、鉄鏃などの出土割合というのが非常に高かった。それで兵舎であったという可能性が考えられているわけです。

その志波城の住居をみていくと、関東系のかまどとして短い煙道と張り出しのかまどがみられ、これらが約半数あります。それから在地的な長い煙道が約半数確認されています。

比較として、811年志波城の移転案が出されて、その翌年に造られた徳丹城をみてみます。その城の中に数は少ないですが竪穴住居があります。長い煙道が94%になっています。志波城の住居の在り方とはまったく違う割合を示しているということになります。土師器坏は轆轤成形がほとんど、甕の方は轆轤成形と非轆轤成形とが共存するというような格好になってきます。

こういうことからいきますと、伊治城、志波城というのは、外から、外というのはおそらく関東、北陸ですが、そこから連れてこられた兵士、それと人的に徴用された在地住民との混住が想定

されます。もしくは住居建築あるいは土師器の調達で在地住民の大掛かりな支援、これは積極的に支援したというよりも強制的に徴用させられた、そのどちらかであろうと考えられます。

次にC類型ですが、大崎平野、今の宮城県の県北の方の大崎市、前の古川市のあたりの例をあげます。まず大和町の一里塚という遺跡があります。このあたりは黒川郡に相当しますので、9世紀になって黒川郡家が成立します。遺跡中央部から北にかけての官衙区域が造られています。

ここで取り上げるのはその部分ではなく、南部の大溝と柵によって、その周りを囲まれた集落です。それで囲郭集落とっているわけです。南小泉の場合には、大溝だけで柵はありません。柵の有無によってある人は仙台の方は区画集落、こちらは囲郭集落と区別している人もいますが、目的は同じなのでここでは一括していききたいと思います。一里塚の年代は7世紀の後葉から8世紀の前葉までの間です。

ここではほとんどが長い煙道を備えています。関東系土師器というものも出土はしますが、ほとんどは在地系の土師器です。ひところ関東系土師器というものが注目された時期には、ここからも関東系土器が出たから、移民の集落だといっていました。ですが、よく吟味してみると住居も在地系、それから土器も主体は在地系であるということがわかってきました。

次に加美町の東山遺跡を取り上げます。発掘が進んでその南側に非常に立派な条里制みたいな、市街地と言ってもいいぐらいのものが確認されています。壇の越遺跡という、別の遺跡の名称になっていますけれども、一体的に造られた遺跡です。ここで取り上げるのは、東山の本体部分、壇の越よりも一段高いところ、郡家が造られた丘陵部の部分です。

きちんとした郡家遺構も確認されていますが、その前段階に竪穴住居が70棟あまりが確認されています。それらは長い煙道のかまどをもっています。また住居の軸がほとんどが真つすぐ北を向くのではなく、ちょっと西に振れる、角度がちょっと微妙に30度から10度ぐらいの幅を持つんですけれども、いずれ西に振れるという特徴があります。

それから住居の規模が、大形から小形とがあります。この言い方は説明が必要でして、私が言う大形、小形というのは、あまり規模の違いはないと考えてください。私が言う本当に大きい例は超大形と言っています。面積でいうと60平米以上のものを大きいものと考えます。それから特大形というのがあるんですが、40平米から60平米のものをいいます。つまりそれらは集落の中でも階層化されて、上の方の階層の人たちの住居であると私は考えています。40平米以下というのはいくつかに分かれます。それをたまたま大中小と言っていますが、それは基本的には階層的にはそんなに変わらない人たちと考えています。ですからほぼ小さい方の、階層化されていない住居構成がされているということです。そういうもので統一されているということです。

在地系の土師器とともに須恵器が入ってきています。その須恵器は蓋とか、稜埴、硯という、普通の一般集落では出てこない器種です。そういう官衙的な器種を含む須恵器が入ってきている。ですから明らかにこれは官的な目的でつくられた集落であると考えられるわけです。ただ、それもほかからやってきたのではなくて、地元の間人がここで移された、取り込まれてしまったと考えるべきだろうと考えています。

このようにC類型というのは、基本的にはここに住んでいた人は在地の間人ですが、ここに住ませたのはおそらくは中央政府と考えられます。

次にD類型です。まず八戸の古代集落。先ほどは5世紀の話をしました、今度は6世紀末あるいは7世紀の初めぐらいに、この八戸のあたりで古代集落が成立します。若干時期はずれるんですが、7世紀に入ったあたりで、ほぼ岩手県も含めて太平洋側の地域にこの古代集落というものが成立します。

それまではどうであったかという、定型的な集落がない時代、いわゆる「続縄文」並行期で、竪穴住居がない時代でした。そして6世紀末あるいは7世紀初頭になって、東北北部でも竪穴住居が普遍化してきます。その初めが6世紀末あるいは7世紀初めということなんですが、その中で一番古く考えられるのは、八戸の根城遺跡です。根城というのは根城南部という南部氏の中世城館になりますけれども、その一角でこの時期の集落が確認されています。住居には煙道がありません。煙道なしのかまどです。

ですからこれだけを見ると、関東からやってきたのかという話にもなっていきます。関東のかまどは基本的に煙道がないといわれていますが、ただ、この煙道がないものというものは、東北南部あるいは東北中部でもあります。かまどに長い煙道が取り付くのは6世紀ぐらいから普遍化してきます。ただ、そのあとも煙道のないものも残っています。

今は八戸の例をお話ししましたが、さらに盛岡のあたりでも初期の住居というのは煙道がないのです。ですから一定の範囲で、こういった無煙道のかまどが分布していたことになります。八戸のあたり馬淵川流域、盛岡あたりの北上川上流域のあたりの初期古代集落においては、一般的な地域性と考えることができるのではないかと考えています。

それから土師器には甕がありますけれども、それにはヘラミガキを多用しています。これは東北中部、仙台平野あたりにいきますと、ケズリとかナデとか別の調整技法を多用するんです。また底部が直立するという、底部が真っすぐ立って、それから外に開くというタイプが多いんですが、そういうものもかなり在地色の強い土器です。東北南部ではないということです。

坏の方もミガキ多用で内穹器形が主体を占めています。わずかですけれども、関東系の長筒形の土器とかもみられます。それと同時に、おいらせ町、これは八戸の北の方になりますが、阿光坊古墳群で東北北部の墓制が成立してきます。

こういったことをみていきますと、外からの人間を考えるのではなくて、在地住民の発展として考えた方がより自然ではないかと私は考えています。これは松本建速さんとは真っ向から対立する展開で、後でゆっくりと議論になるかなと思います。

次に末期古墳について。主体部の形状をみると、まず土坑型があります。地面に穴を掘って、おそらくは木槨をしつらえる。土坑の壁や底に木を組み込んで、埋葬するというタイプです。土坑型あるいは木槨型と言っています。これは東北北部、岩手県から青森県、そして北海道に分布しています。その年代をみますと、古いところでは6世紀の末あたりから、新しいところでは9世紀あたりまでです。北海道の江別の例は、土器でみる限りは9世紀に入るものもあると思われます。土坑型には細かい細分はあるんですが、それは時期差までは反映してない、地域差を反映しているようです。

次に礫を使ったものですが、礫床型は細かい砂利を敷いているものです。これはたぶんこの上に棺、木棺を置いたんだろうと思います。出てくる土器からしますと、7世紀の前葉あるいは中葉あたりと考えられます。

礫槨型ということで、川原石を積むようなタイプなんですけど、礫槨A型としたもの、これは金ヶ崎という岩手県でも南の方にありますが、その道場（ドウバ）古墳で確認されています。3、4号墳などから出てくる土器などをみますと、6世紀末あるいは7世紀前葉ということで、これは土坑型の古い初源期とほぼ同じ時期です。

ただ、これは礫を平積みといいますか、礫の長い方を主体部の軸線に合わせていますから、あまり高く積むことはできないだろうと思います。ですからそんなには高くない、1段か2段程度の積み上げだったんだろうと思われま。

礫槨B型というのは、川原石を小口積みとします。石の長辺を軸線に対して直交させるような形になっている。これもそんなに高くは積んでない、2～3段ぐらいいかなと思います。これは7世紀の中葉から8世紀の前葉です。出土遺物からほぼこのあたりに限定できます。

それから、礫槨C型というのがあります。石をふんだんに使うというものです。それから立石、間に石を立てるようなものもあります。礫槨D型というのは、9世紀になってしまいますので、今回はあまり詳しく述べません。

ところで、礫槨C型というものが関東、あるいは中部地方と関連性があるのではないかとされています。参考までにと思って、府中市のものを1つ挙げました。これは地下を掘って掘りくぼめて、そこに川原石を小口積みにするというやり方です。掘っていますから、その周り、石との間に粘土かあるいは小さな砂利を中に入れるという、それで裏込めにするというような形を取っています。もう一つの例は松本市のものです。主体部だけでも8メートルぐらいあります。ほかのものに比べると、はるかに大きい。もちろんこの中には石室の部分と、それから、羨道部分というか分かれているんだと思いますが、いずれ非常に大きいです。これもやはり地面を掘るといって、いわゆる半地下式のもの。そして石を積むという形です。

東北北部のものは基本的には地下を掘らない、せいぜい当時の地表面を整地して、多少、掘りくぼめることはあったんだと思いますが、そこに石を積んでいくというやり方です。ですからマウンドが高くなる。関東中部地方のものは基本的には地面を掘りくぼめる半地下式です。これに石がなければ土坑形になるようなものです。ですから確かに似てはいるけれども、これを1つの系譜としてとらえるかどうか、それはいくつかの考え方があると思いますが、私は系譜上はつながらないだろうと思っています。

次に盛岡市の上田蝦夷森のものと恵庭市の西島松のものとを比較してみます。非常によく似ているんですが、主体部と周溝の関係でいきますと深さが全然違うんです。東北北部の土坑形というのは非常に深いものです。非常にといっても何メートルもというわけではないのですが、周溝よりも明らかに深い。北海道のものについては、基本的には周溝と同じか、あるいは周溝よりも浅い可能性があります。

例えば江別市の後藤遺跡、江別市で調査されましたが、以前に後藤守一先生や河野広道先生が掘られたときは、マウンドが残っていたといわれています。そのときは主体部があったんでしょかね。ところが後藤遺跡を調査されたとき、江別市教育委員会で調査されたときには、主体部がもうほとんど残っていなかった、上部が削平されてしまうと周溝だけが残るといってタイプです。

そういう意味では平面図だけみると非常に似ているけれども、造り方というものはどうも違



いそうです。東北北部のものはまず地面を掘って埋葬して、それからマウンドを盛る。北海道のものは基本的にマウンドを造ってから、それから主体部を造るものになっているのではないかと思います。そういう違いがあります。ですから確かに末期古墳あるいは北海道式古墳ということで、似てはいるけれどもその造り方というのは決して同じ思想を持っていたわけではないということを、指摘しておきたいと思っております。

さて、次に北海道の擦文の成立期の集落です。成立時期は7世紀後葉と考えています。それまではテント様の住居から、竪穴住居というものになってきます。それから続縄文土器から擦文土器へ変わってくる、これをもって擦文文化の開始と考えてよろしいのではないかなと思います。その中で古い方の遺跡として、千歳市丸子山遺跡を挙げたいと思います。小高い独立丘の上の方に集落が形成されています。

6棟の竪穴住居が確認されています。時期は二時期に分かれそうです。4号住居などをみますと、真ん中に炉を持っていて、さらに北西の壁にかまどがあります。つまり炉とかまど、両方併存するというタイプです。

さらに壁の下には小さい穴がたくさん並んでいます。これはおそらくは壁の崩壊を防ぐための土留め用だと思いますが、いわゆる周溝がこういうふう小さいピット状になるというのはこちらの特徴だろうと思います。東北地方に行くとはほとんど溝状になっていまして、ちょっと違います。

それから土器をみますと、確かに坯は、一見すると東北地方の坯によく似てはいるんですが、土器の作り方、坯の作り方でも、最初に大きい円盤を北海道では作るらしい。それを元に積み上げていくというタイプですね。もちろん東北も同じように円盤から作るんですが、その円盤の作り方が最初は小さいものです。それから作り上げていきますから底径が小さく、あるいは底部の丸みが異なったものになります。ですから北海道のものは底部が比較的大きくて、そして平底に近いタイプの坯になるという、そういう違いがあります。

甕も、どちらかというとその前段階の続縄文段階の、いわゆる北大Ⅲ式の器形というものを踏襲している。例えば八戸なんかの器形とは違ってきます。そういうことからいきますと、北海道の地域性というのは強いということ。一見すると東北北部と同じような文化であるとみえるんですが、細かくみていくと違いが明らかです。

東北北部の竪穴住居数の変化にはいくつかのピークがあります。そのピークの一つが7世紀の後葉あたりに見受けられます。ちょうどこの時期に擦文文化の開始があります。つまり何らかの因果関係を認めることはできるのではないかなと思っております。ただ、これを私は人そのものの移住とは考えないで、やはり何らかの文化的な要素の波及と考えています。

次に、石狩低地帯の南北での違いについて触れてみたいと思います。千歳、恵庭あたりを中心とする南部の地域、シコツとよんでおきたいと思えます。シコツというのは江戸時代の表現ですが、志古津場所というのがありました。志古津より勇払の方が適切だにご指摘を受けたこともあります。ここではシコツと表現しておきます。シコツ地域というのは7世紀後葉段階から竪穴住居の形成があります。それに対して北部のイシカリ、札幌あたりですが、その地域というのは7世紀後葉～8世紀前葉の段階というのは、遺跡そのものものはっきりしていません。

8世紀中葉段階から、サークル会館1、2号住居跡が出てきますが、包含層出土も多く確認さ

れています。つまり住居が形成されてないということです。石狩低地帯に明らかな南北差が認められるわけです。

ちなみに末期古墳、北海道式古墳が出てくるのは、シコツ地域の恵庭の1のA号墳というのは8世紀前葉から出てきます。後藤の方は8世紀中葉以降ということになってきます。やはり南北間で時間差があると考えています。

最後に、E類型、これは在地の人間によるものです。後北C<sub>2</sub>-D式の土器ですが、北海道と東北とを比較していただきたいんですが、これには地域差があります。札幌市のK135遺跡ではたくさん土器が出ており、その文様は楕円文が中央にあり、それを関係させるようにいろいろな曲線で結んでいく文様構成が一般的になっています。東北のものはというと、やはり中心となる線はあるんですが、それとはまた別に横の線というのがたいへん強調されています。細かいことは申しませんが、土器でも地域差があります。後北C<sub>2</sub>-D式の東北型と言うべきものでしょうか。ですから北海道の人間が東北に渡ってきたとしても、土器を携えて持ってきたということはない。東北で作っているんだということです。

遺構をみてみます。K135遺跡では小さなピットがいくつも検出され、不整形な五角形の柱配置からテントのようなものが想定されています。また岩手県の岩泉町豊岡という遺跡からは小さい楕円形の堅穴に真ん中に炉を持っている小堅穴が確認されています。ピットはないようです。両者とも非常に簡素で小形の住居なわけです。そういう意味では共通していると思います。規模的にもそんなに変わりません。こういったものが検出されている遺跡が少ないので、ピットと小堅穴の違いが地域差なのか、あるいはたまたまこうなったのかという断定はできませんが、このような異なる例もあるということです。

それから墓ですが、これは後北C<sub>2</sub>-D式から北大I・II式段階まで、世紀ごとに分けて比較しますと、北海道のものと東北北部のものとは微妙に違います。北海道の例えば千歳の末広のものは円形で、基本的には施設を持ちません。同じ時期の東北北部では楕円形で、両側に長軸の端にピットを持ったりします。横手市の田久保下のものなどは、土器と土器を合わせるという、合わせ口にしています。こういうタイプというのは北海道ではないタイプです。

同じ時期でも違う形状ということになります。ですから例えば北海道の人が東北に渡ってきて、そこで死んだから東北で埋葬することではないんです。東北は東北の人が埋葬されているということです。つまりここには明らかな人の移動というのが認められないということですね。

それは石器からもいえます。北海道の方は量は遺跡によってばらつきはありますが、器種が豊富なんですね。石鏃が残っていたり、あるいは礫石器がたくさんあったりします。ところが東北の方に行くと、器種が少ない。黒曜石のスクレーパーだとか、あるいは方割石、ちょっとした皮なめしに使うだろうと最近言われていますが、そういうような石の破片が出てきたりします。非常に器種が少ない。石器組成がまったく北海道と東北では違う。しかもそれと同時に鉄器の普及率も明らかに、これはもう画然たる差があります。

最後に津軽平野です。ここには先ほど述べました住居の大きさによる集落内の階層性というものがあります。その階層性をみていくと、決してほかの地域からやってきたのではなくて、津軽なら津軽の地域の中で発展したものとみざるを得ない、そういうような現象が確認されますので、ここも移住ではない。人口は爆発的に増えるので移住者がいたんだといわれています

けれども、その考古学的な証拠をみていくと、決してそれをとらえることはできないということです。

終わりになります。移住、移民と明らかにとらえられる例だとか、もしくはそれに準ずる例というのは住居、土器共に故地の特徴を強く残しているということが大きく言えると思います。それらのものはほとんど国家の関与によるものが多いと考えられます。八戸地方の古墳時代の集落について、これは国家の関与、このころはまだ王権の時代ですけれども、ちょうど王権の拡大政策が行われた時期ですね。倭王武が宋の国へ使いを出しています。そういう時期と符合しているというのも、やはり何らかの関係があるだろうと思います。

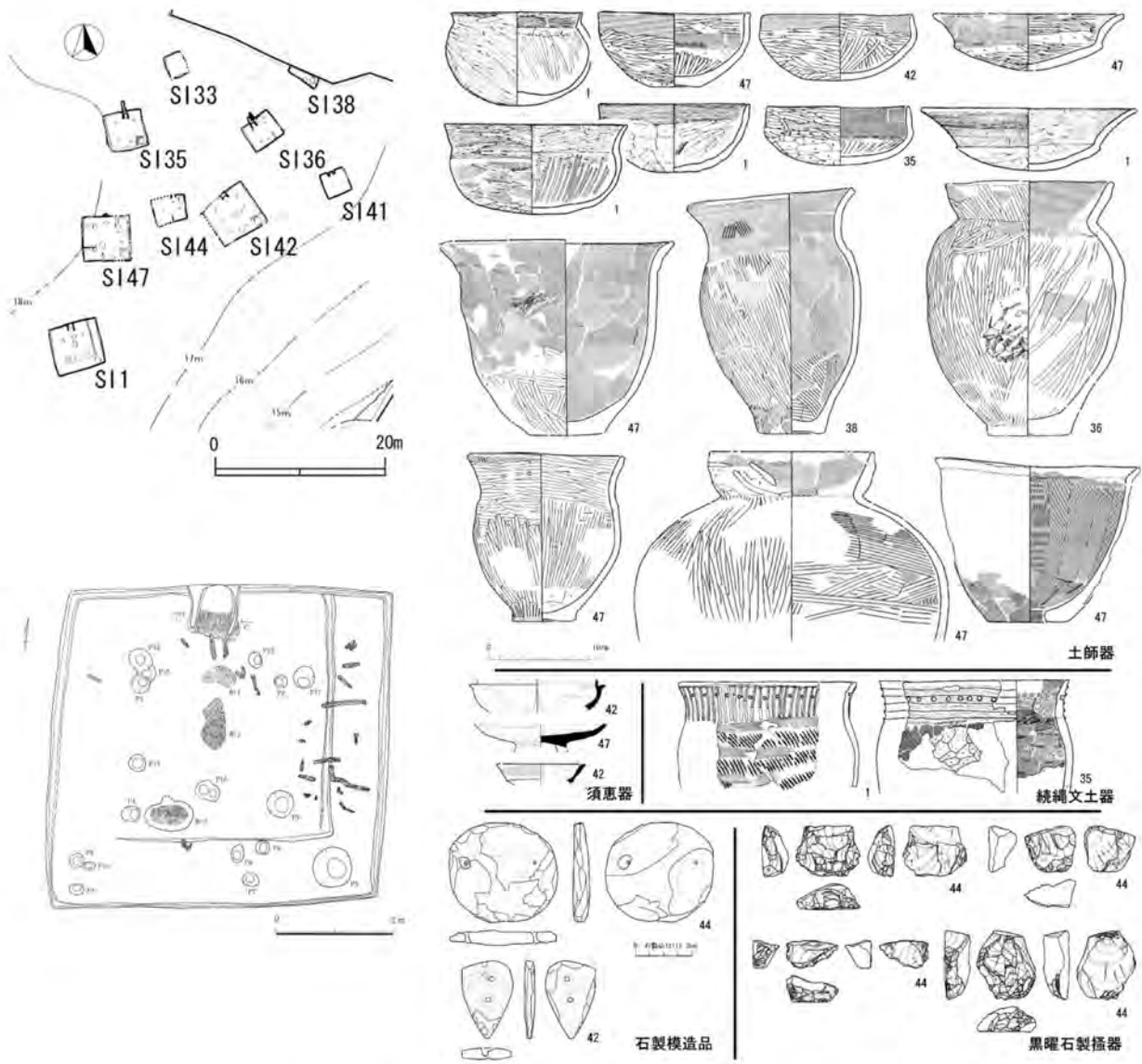
それから在地系の集落というものは、在地住民による画期が認められるけれども、住居や土器には在地性を強く残しています。

東北北部の古代集落の成立については、気候の温暖化ではないという説もありますが、たぶん温暖化があったんだろうと思います。それから国家政策もいろいろと動く時期です。6世紀後半あるいは6世紀末あたりのいろいろな文献での動きがあります。先ほど出ていました蝦夷国境の設定など、そういったような政策の余波を受けている、あるいはそれに伴って北方交易の活発化などがあって、それで定住化が進行したんだろうと解釈されるわけです。

それから擦文文化も、先ほど申しましたように東北北部の集落拡大期に当たっております。その余波を受けて、石狩低地帯南部に成立をしたんだろうと思います。それから後北C<sub>2</sub>-D式については、これは逆に北海道から東北にやってきたんだろうといわれていますけれども、そうではなくて古墳寒冷期に当たっていて、同じような気候条件、自然条件の中で広域的な遊動生活が同じように行われた、営まれたんだろうと考えています。

ただ、いくつかの課題も残されておりまして、移住した後、もし仮に移住があった場合に、その移住の中で文化変容がまったくなかったのかということです。その辺をどう評価するかということが、これからまだ残されているものではないかなと思っています。逆に移住があまりなかったとした場合に、在地の住民がその画期をつくっていく、そのためのインパクトは何か、それがどのようにして入ってきたのか、それについてもこれから究明していかなければいけないだろうと思います。

時間を超過しましたが、これで終わります。

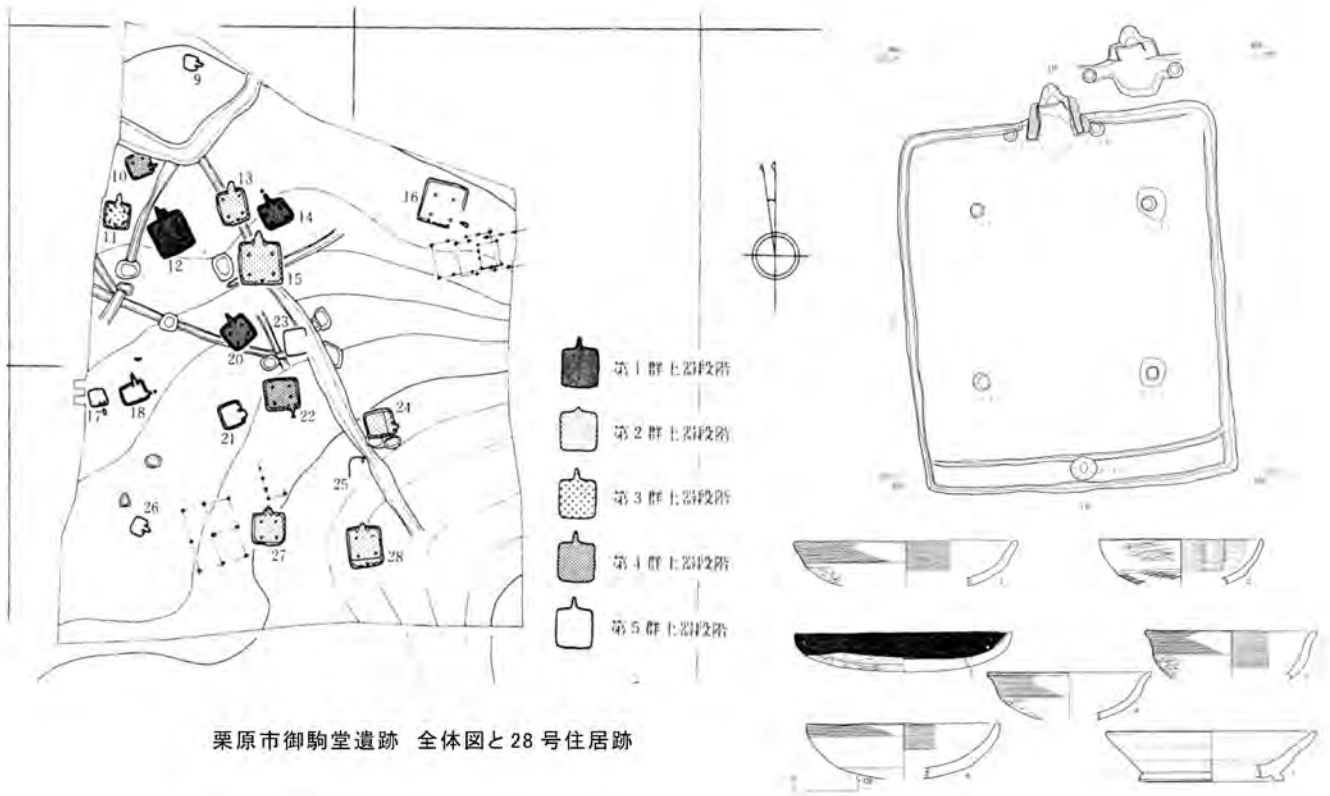


八戸市田向冷水遺跡 (左上:全体図 左下:S11住居跡 右:関係遺構出土遺物)



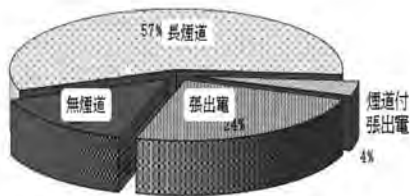
仙台市南小泉遺跡 SI25 住居跡出土土器

(漆=黒色仕上げ(漆塗り)で緻密な胎土 密=緻密で赤褐色粒を含む胎土)

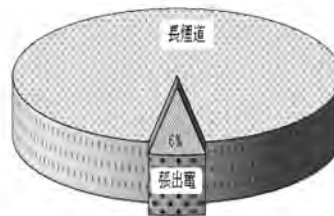


栗原市御駒堂遺跡 全体図と28号住居跡

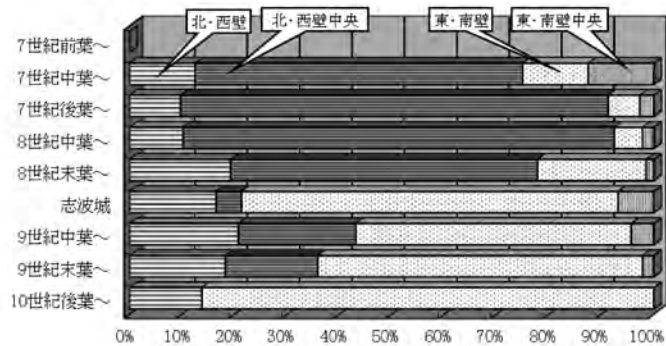
志波城跡の竪穴住居の窠形状



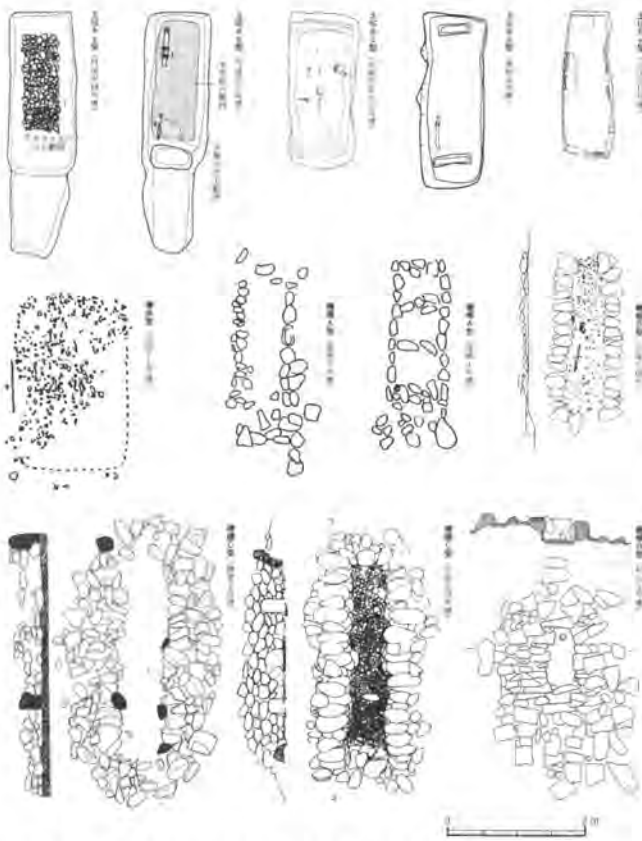
徳丹城跡の竪穴住居の窠形状



志波城跡・徳丹城跡の窠形状

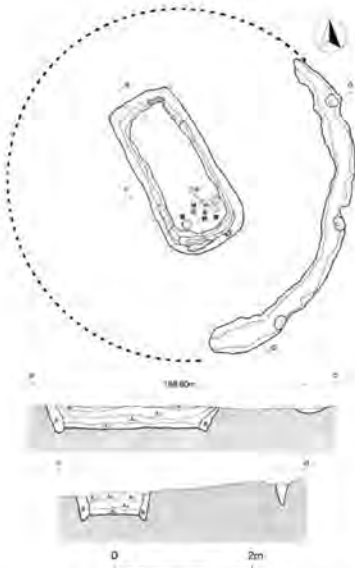
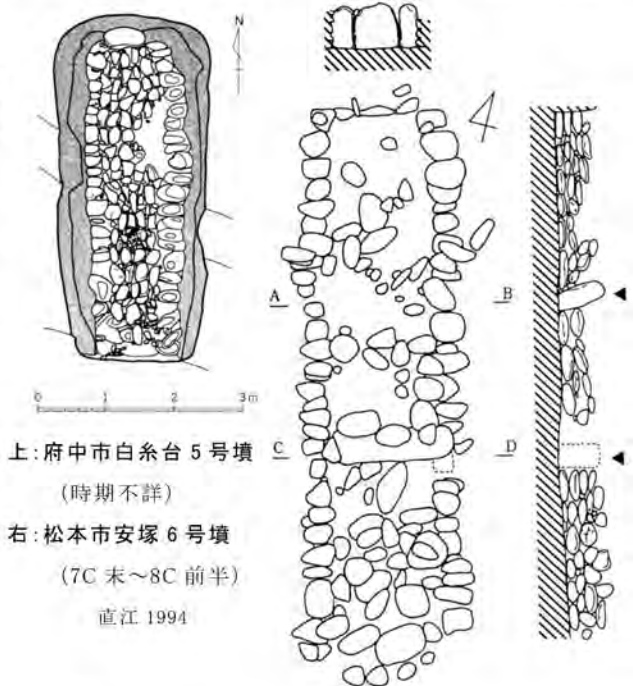


斯波北部の住居窠位置の変化

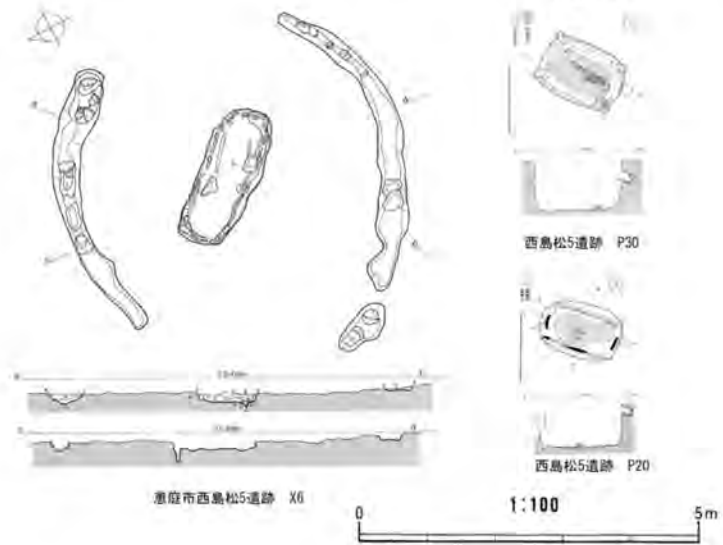


東北～北海道の末期古墳部の類型主体

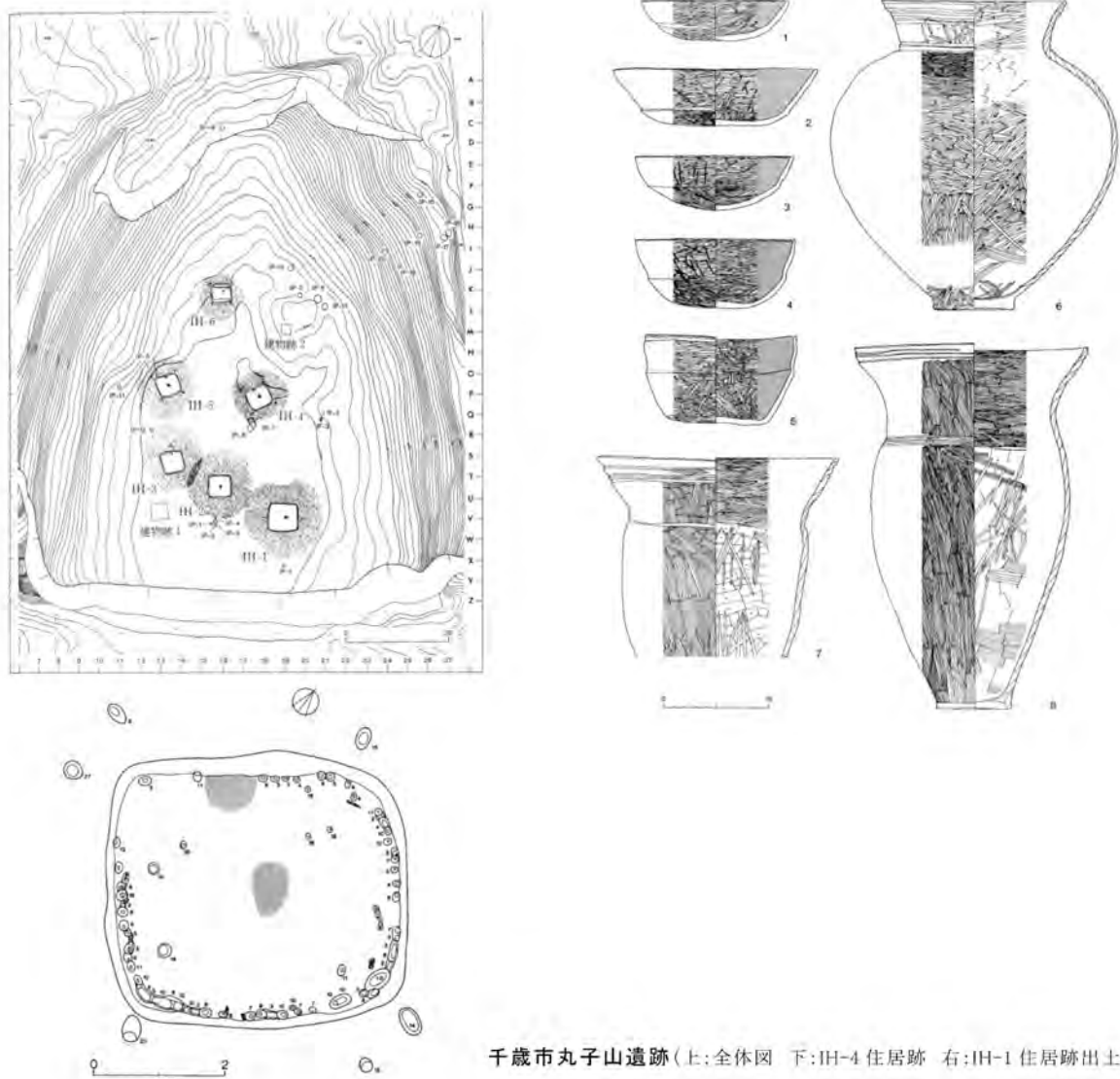
類型	墳	年代
木槨(土坑)型	おいらせ町阿光坊古墳群a2号墳	6C末～7C前葉
	北上市岩崎DⅢv17号墳	
	盛岡市上田蝦夷森1号墳	7C前葉～中葉
	八戸市丹後平01・15・33・46号墳	7C中葉～8C前葉
	山田町房のRT01～35号墳	7C後葉～8C前葉
	柏木東1・8・9号墳	8C前葉
木槨(礎床)型	江別市元江別(後藤)15号墳	9C前葉～中葉
	八幡平市谷助平1号墳	7C前葉～中葉
木槨型(周濠)	八戸市殿見1号墳	8C後葉～末
	平川町原3号墳	9C前半
	雄物川町柏原2・64号墳	9C後半～10C
礎床A型	金ヶ崎町道場3・4号墳	6C末～7C前葉
礎床B型	北上市五条丸69号墳	7C中葉～8C前葉
礎床C型	花巻市熊堂A-4号墳	8C中葉～後葉
	北上市五条丸22号墳	8C前葉～後葉
礎床D型	一関市杉山5号墳	9C



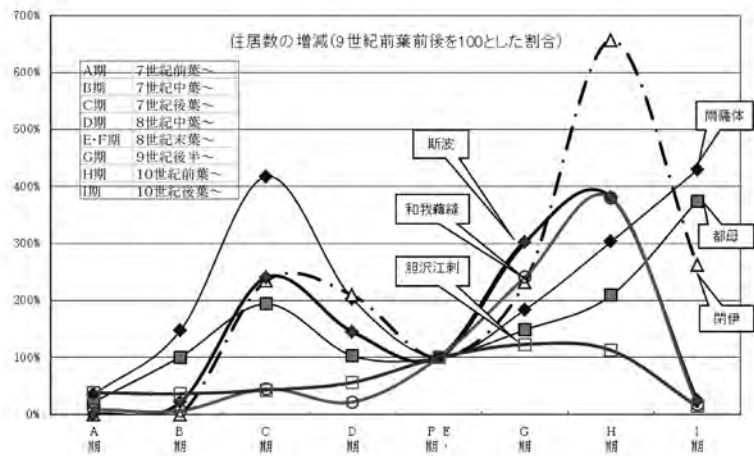
盛岡市上田蝦夷森1号墳



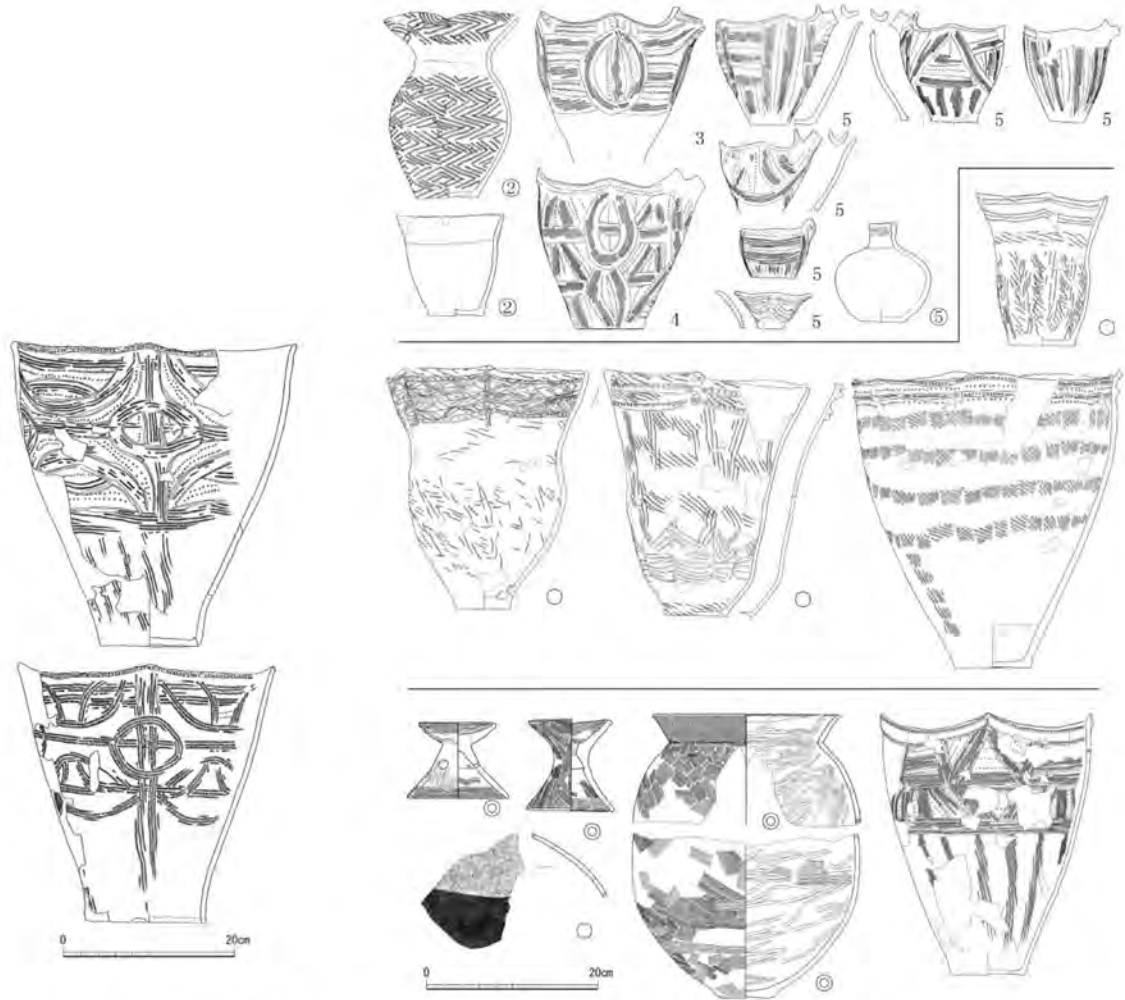
恵庭市西島松5-X6号墳



千歳市丸子山遺跡(上:全体図 下:IH-4住居跡 右:IH-1住居跡出土土器)



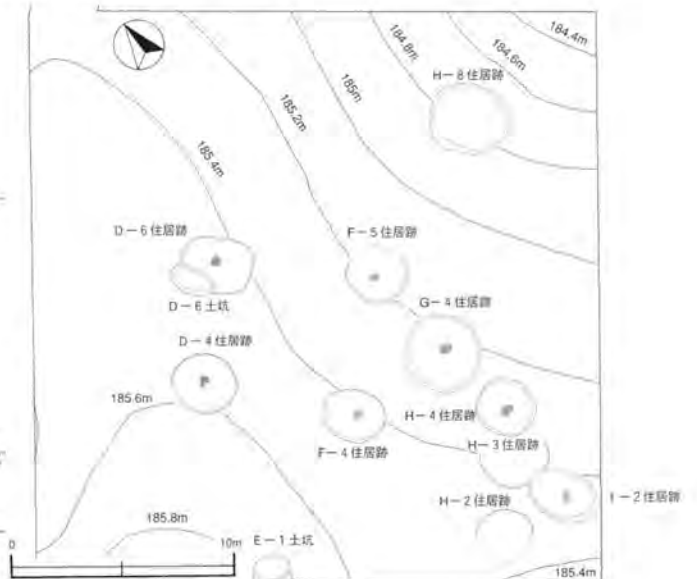
東北部の住居数の増減(7世紀後葉にピークがあり、捺文文化成立の時期と符合)



北海道の後北 C2・D 式土器  
(札幌市 K135 遺跡 VIIc 層)

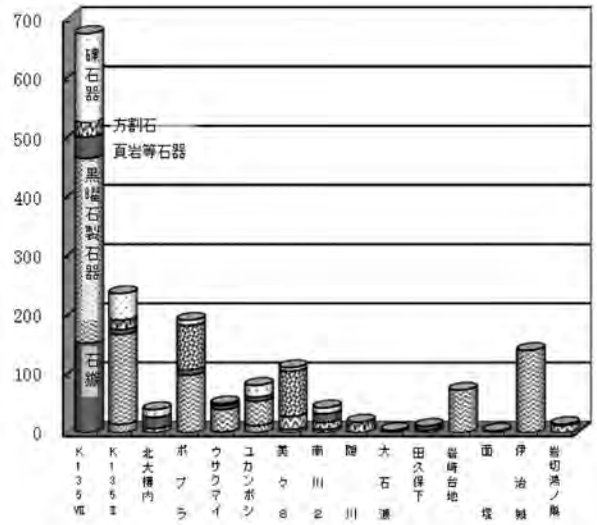
東北地方における後北 C2・D 式を共伴する土器群

(上 寒川Ⅱ遺跡 2~5号墓 中 長興寺遺跡 68号墓  
下 新金沼遺跡 S115 住居跡)



札幌市 K135 遺跡 VIIc 層の柱穴群(左)と岩泉町豊岡 V 遺跡の竪穴(右)





遺跡・遺構	時期
K135(4丁目地点)Ⅶa・c層	3世紀
K135(4丁目地点)Ⅱ～Ⅴ層	4世紀
北大構内体育館建設地焼土4基	4世紀
ポプラ並木東地区土壇墓7基	5世紀
ウサクマイN棟文住居4, 土壇墓33	4～8世紀
ユカンボシC9 I 黒色土層	5～8世紀
美々8遺跡 I 黒色土層	8世紀
南川2遺跡Ⅴ層	3～4世紀
隠川(11)Ⅱ層主体	4世紀
大石渡遺跡	4世紀
田久保下遺跡土壇墓	6世紀
岩崎古墳群	7世紀
面塚遺跡住居跡3	5世紀
伊治城跡SI1215/1217	5世紀
岩切湧ノ原遺跡	5世紀

土壇墓の比較(左) 石器組成(右)

【参考・引用文献】

宇部則保 2007「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 pp114～115

熊田亮介 2007「元慶の乱と蝦夷の社会」『九世紀の蝦夷社会』高志書院 pp292～295

直井雅尚 1994「松本市安塚・秋葉原古墳群の再検討」『中部高地の考古学』IV 長野県考古学会 pp281～300

西野 修 1998「北上盆地北部」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』p115

船木義勝 2009「『堀と土塁』結界表現の諸相―青森市高柳遺跡の基本的考察」『秋田考古学』第53号

松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社

松本建速 2010「蝦夷は古代日本国領域からの移住者か」『季刊東北学』東北文化研究センター p110

三浦圭介 2006「北奥の巨大防御性集落と交易・官衙類似遺跡」『歴史評論』No.678 p72

村田晃一 2004「三重構造城柵論―伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2―」『宮城考古学』第6号 p165

村田晃一 2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と板東」『古代社会と地域間交流』六一書房 pp153～154

八木光則 2006「陸奥北半における轆轤土師器の導入」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集 pp156～159

八木光則 2007「書評 松本建速著『蝦夷の考古学』」『日本考古学』第23号 p118

八木光則 2011「古代北日本における移住・移民」『海峡と古代蝦夷』高志書院 pp215～235